



山梨大学附属図書館報

ISSN 1348-5458

やまなし

2006.3.1
vol.3
no. 2

contents

1 資料集中管理計画と
今後の予定

3 利用者の声

4 学生にすすめる本

Library Topics

5 利用者講習会報告

6 山梨大学近代文学文庫常設展を開設

7 「神沢利子講演会」開催

7 「恐竜の切手・絵本展」開催

The Yamanashi
Bulletin of the University of Yamanashi Library

<http://www.lib.yamanashi.ac.jp>

資料集中管理計画と今後の予定

おおとも としあき

附属図書館長 大友 敏明

はじめに

学生・院生や教員の方々から「附属図書館のOPAC（オンライン蔵書目録）で検索して資料が研究室にあることはわかったけれども、それをどうやって閲覧したり借り出したりすることができるのですか」と、情報サービスの担当者がしばしば訊ねられることがあります。現在附属図書館（本館）は、一部の資料を除いて、研究室や講座・学科書庫にある資料の閲覧や貸し出しの仲介サービスを行っていません。それは当該の資料が本当にその研究室にあるのかどうかについて附属図書館が最終的に確認できていないからです。大学が法人になるときに蔵書点検を行いました。しかしそれは不十分なものと考えています。学部改組などの組織変更があったために、この研究室にあるはずのものが別の研究室や書庫にあった場合などが報告されているからです。こうした実態をふまえて、いま附属図書館が甲府キャンパスで実施しようとしている集中管理計画は、資料の所在を附属図書館がすべて把握し、その上で資料を利用希望者に迅速に提供するために行うものです。この計画を少し詳しくご説明します。

1 現状について

甲府キャンパスには、現在約47万冊の資料があります。そのうち約27万冊はOPACで検索することができます。この27万冊のうち約20万冊が附属図書館にあり、残りの約7万冊が研究室や講座・学

科書庫にあります。附属図書館にある資料はもちろん閲覧できますが、研究室や講座・学科書庫にある資料は、一部を除いて、上でのべた理由から閲覧することはできません。さらに1989年以前に購入された研究室や講座・学科書庫にある約20万冊の資料はまだOPACに入力されていないのです。この20万冊の資料をOPACで検索可能な状態にし、資料の所在について附属図書館が正確な情報をもつことが、資料の有効利用の基礎的な前提となるのです。

その際、蔵書点検のデータは使えないのかという疑問の声が上がるかと思えます。蔵書点検は図書資産台帳を電子化しリストを作成しましたが、これは書名のみですから、OPACへの入力には使えません。また旧来のカード目録からOPACへ入力できないのかという疑問もあるかと思えます。これは2つの理由から困難かつ非効率です。ひとつは、カード目録は国立情報学研究所のNACSIS-CAT(目録所在情報サービス)が規定する書誌データを完全にはカバーしていないのです。まったく使えないわけではないのですが、書誌データとしては不完全です。もうひとつは、かりにカード目録からOPACへ入力するにしても、カード目録から当該資料の管理者（教員）を特定することはできないので、作業は逆にして、管理者の占有している資料（図書資産台帳）からリストを作成し、その資料リストから

当該資料のカード目録を拾い出した上で入力作業を行う必要があります。これは大変煩雑な作業で膨大な時間を要します。

2 集中管理計画の実施手順について

そこで現在、資料の集中管理を3段階に分けて実施する予定です。

第1段階は、すでに定年退職された教員、異動教員の研究室（用途替えの室を含む）や講座・学科書庫にある資料のうち不要な資料を附属図書館へ持ってきていただきます。運搬作業は図書館職員が行います。この際、資料リストの作成を義務づけません。

第2段階は、これも資料のリスト作成を義務づけずに研究室にある資料のうち、附属図書館に返却してもよい資料を回収します。

第3段階は、研究室や講座・学科書庫に所蔵されている未入力的全資料を順次入力していきます。この作業は、夏休み期間中等を利用して図書館職員が行います。

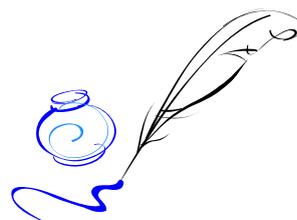
完了するまで長期にわたりますが、いずれの段階も当該講座・学科および教員の合意のもとに進めていきます。要は、資料の所在の正確な把握とその資料の有効利用が目的ですので、あくまでも不要な資料だけを附属図書館へ移動していただければよいのです。それ以外は、研究室や講座・学科書庫において、随時の資料請求に対応できるだけの資料の管理をお願いします。またこれと並行して、定年退職教員や異

動教員の資料の引継ぎ手続きの方法を確立します。100%資料の所在が把握できるまでは経過措置をとりますが、研究室の後任の方が前任者の資料の管理責任を問われないようにします。

以上の計画の実行を受けて、甲府キャンパスでは平成18年度から資料の集中利用システムを少しずつ稼働させます。集中利用システムとは、研究室や講座・学科書庫にある資料を利用したい場合には、附属図書館がその仲介サービスをする、ということです。資料の閲覧希望があった場合には、資料の管理者に原則として附属図書館に資料を持参していただき、利用希望者に閲覧等のサービスを迅速に行います。

おわりに

資料が存在するのに利用できない状態から脱却することが附属図書館のサービスを向上させる第一歩だと考えます。しかしこのサービスが円滑にかつ十分に行えるには長い時間を要します。その間の経過措置等を含めて教職員の皆様には情報を公開し合意を得ながら進めてまいりますので、計画の趣旨をご理解の上ご協力をお願いします。



図書館の二面性

大学院医学工学総合教育部
機械システム工学専攻 修士課程1年次生
(夜間カウンター担当)

ゆかわ ひろき
湯川 博基

昨春、大学院に進学し日々研究を行なう中で、図書館の重要性を再認識する機会が増えた。本学には電子ジャーナルを利用することで、時間、場所を選ばず瞬時に論文検索できるシステムが構築されている。また、本学図書館に所蔵されていない書物であっても、他機関との連携による図書借受システムによって、目的の書物を閲覧することが可能となっている。他にも申請することで、開館時間外でも図書館を利用できるサービスがある。これらを有効活用することによって、効率よく研究を進めることができている。

このような大学における図書館サービスの充実に目を見張る一方で、地域社会における図書館の役割について、1年間の図書館業務を通じて考えさせられた。

本学には、学生ボランティアによって運営されている子ども図書室が存在する。そのボランティアと図書館のスタッフによって企画されたイベントが、本学図書館で行なわれたことが何度かあった。ちょうどその日に受付業務を担当しており、イベントに参加する子供たちと触れ合う機会があった。子供たちの目はみな輝いており、好奇心にあふれていた。そこには、研究のための図書館ではなく、地域に開かれた図書館があった。図書館を地域に開放することは、子供と大人、或いは大人どうしの交流の場を広げることに繋がり、地域社会の教育力の向上に貢献できると考えられる。

今後、研究のための図書館として、また地域に開かれた図書館として、新たなニーズにフレキシブルに対応する姿勢が期待される。



さわやかなきもち

医学部医学科5年次生

いけだ とくじ
池田 督司

はじめて図書館に入ったのは、おそらく入学手続きの日だった。後期試験で運よく医学部にすべりこんだものの、まだ医者という職業に対して漠然とした憧れしかもっていなかったぼくは、とりあえず大学とはこういうところだという感覚をつかみたくて、病棟周辺の駐車場やら講義棟やら図書館やらテニスコートやらセブンイレブンやらをふらふら歩いてみた。それらはどういうルートでどういう順番だったかまではっきりと思い出せない。ただ、図書館に入ってみたとき受けた感覚は今も十分に思い出せる。

二重の自動ドアを潜りぬけると茶色の絨毯がみえる。左手には防犯用のゲートがあって、右手には一枚の壁を隔てて幾つかの新聞が並べてある。ゲートをくぐると左手に第一閲覧室があって、右手に貸し出し用の受付があって、そして正面には検索用のパソコンが数台置かれてあって、すぐ横から、それらのパソコンをかこむように階段が二階へとつづいている。二階にあがると、文学や法律関係の本が並ぶ第二閲覧室と、医学書が中心の第三閲覧室があって、その間には学習室というスペースもあって…。こんな感じだ。

図書館をよく利用される方はわかると思うが、結局、図書館は今も昔も、さほど変わっていないのである。もちろん、小さな変化はある。学習室の近くに「生と死のコーナー」が設けられたり、パソコンが新しくなったり、絨毯が敷きかえられたり。なにより、学習机で勉強する学生の顔ぶれは、大学受験と国家試験の季節に、ぷつぷつと入れかわっていく。新しいものと、去りゆくもの。人間のうつろいは、季節にもまして、ひどく変化に富む。

だが、図書館の中の風景に大きな変化はない。多くの医学書を並べた第三閲覧室の本棚、本棚に沿うように並べられた窓辺の机、窓越しにふりそそぐやわらかな日差し。これらは、時間が経っても、利用者が移りかわっても、動くことのない、静かな場所だ。内なる風景は、うつりゆく人間をやすらかに受け入れて、どっしりと構えている。

ぼくは机に座るたびに、ゆったりとした気持ちになって、のんびり勉強や読書にとりくむことができる。図書館の、静かな場所にいるからだ。さわやかなきもちになって、眼を閉じる。それは、はじめて図書館に入ったときに受けたあの感覚そのものだと思っている。

「人間の条件」

◆ ハンナ・アレント 著 志水速雄 訳
ちくま学芸文庫 1994教育人間科学部 国際文化講座 いのうえ のりお
井上 範夫

進歩と開明に向かっていった筈の近代は、20世紀、二度の世界大戦、そして絶滅収容所、核爆弾、或いは粛清、ラーゲリ・・・を生み出し、21世紀の今も依然世界各地に対立、紛争、テロの絶えることがない。アレント（1906～1975）はユダヤ系ドイツ人の思想家。ハイデガーやヤスパーズに就いて学び、ナチス台頭とともにフランス、次いでアメリカに亡命、現代史の激動の只中で思索を続けていった。アレントは、人間を人間たらしめる根本的な条件として生命体、非自然性、多数性を挙げ、それらに対応する労働、仕事、活動の三つの基本的活動力を考察する。彼女によれば、近代の世界史とは生命過程、それを維持するための労働、労働を組織する共同体としての社会を最優先させることで、実は公的な共通世

界を消滅させた「世界疎外」の過程に他ならなかった。一方、多種多様な人々が存在するという人間の多数性が必然的に成立させる活動と言論こそ、人々がそれを通して「創始」を競い合い、互いに人間として姿を現し合って「生を輝かせる」真の公的空間、公的共通世界の源であり、彼女はそうした空間の淵源を古代ギリシャのポリスに見出す。こうしてアレントはヨーロッパ哲学・思想の歴史を包括的に視野に入れながら、世界史の歩みの（通常の）意味を読み替え、「政治」概念の根底的な変革を提起する。混迷を続ける世界の中で、未来に向かって人間の活動、人間の組織・共同体をどう考えるべきかという時、彼女の著作は欠くべからざる重要な手掛かりを与えてくれるものと思われる。

所蔵案内：『人間の条件』
本館2階 一般書架
分類：114



「若き数学者のアメリカ」

◆ 藤原正彦 著 新潮社 1981

工学部 土木環境工学科 さとう まさひさ
佐藤 眞久

この本が出版された1977年は私が博士課程に進学した年で、外国に行くことは勿論、大学に外国人研究者が来ることさえ珍しい時代であった。私自身も含め周辺の大学院生は、この本を読み外国への留学の夢を掻き立てられたものであった。とは言え、この本は留学の素晴らしさを語るといった類のものではない。アメリカへの留学を通じて、アメリカやアメリカ人に対する変化していく思いや心理的变化を、アメリカの社会や人間像を交えながら描写し書きつづっている。

著者のアメリカへの留学は、日本対アメリカという一種の真珠湾奇襲とも言うべき対立的心理状態から出発し、ミシガンの低くたれ込める灰色の冬の空と相まって容赦

なく奈落へと追い込んでいく。しかし、南方の開放的な空を持つコロラドに移り、大学で数学の講義を持ち、人々と交流する中で、絶対的な強さと自信を持っていると思いついていたアメリカ人も、同じ涙を流し、もがき苦しむ、皆「自分と同じ人々」だったと気づく。強い対アメリカという無意識の対立の意識が、ごく当然のことを気づかせないでいたのだ。さらに、人々と「心の奥深い部分を通わす」ことが出来なかったのは、人々に対する「愛の心を持つこと」に欠けていたからだと悟っていく。

学者の交流は研究が目的であっても、心の交流が大切であり、ここに留学の素晴らしさを読者は見いだされるであろう。これには決して商用や観光、単なる語学留学などでは得られない素晴らしさがあり、それらが生き生きと表現されているため、これが若き研究者や大学院生に留学の夢を掻き立たせるのであろう。この本には日本とアメリカの比較が随所に見られ、鋭

次ページへ➡

前ページより ➡

く解析されている。例えば、日本とアメリカの歴史の違いは、多くの人が涙した長さの違いであると分析している。この涙と愛に対する思いは何に源を発しているのだろうか。

著者の母は、随筆家の「藤原てい」である。父は気象庁の役人であり山岳小説家で、直木賞作家として著名な「新田次郎」で、山梨では歴史小説「武田信玄」の著者として馴染みが深い作家である。藤原てい著「家族」（読売新聞社刊）を読むと、その源泉が見えてくる。この本は、父より母である藤原ていの文体や心を受け継いでいると言える。とは言え、挿入されているエピソードなど楽しく読める本である。アメリカの学生の分析なども面白く、日本の学生と変わらない面を持ち妙に安心する。

先生方には、アメリカの大学での評価と運用について、人間模様も交えて書か

れている部分を是非読んで頂きたい。これが法人化後の大問題として現在検討されている「評価とそのあり方」について、アメリカでの状況とそれにまつわる人間模様が良く書かれており、参考になると同時に、日本はアメリカに評価という面で30年は遅れているということが実感される。学生の皆さんは、アメリカの学生群像について書かれている章を読み、アメリカの学生の考え方や行動を自分たちと比べてみると愉快であることでしょう。単に外国に出かけるのとは違い、心の交流を持つ留学の素晴らしさにきっと憧れるようになるでしょう。私たちがこの本を30年前に読んだときのように。



所蔵案内：『若き数学者のアメリカ』
本館2階 一般書架
分類：295.3

利用者講習会報告

附属図書館では、甲府キャンパスにおいて、“論文入手のための文献検索説明会－日本語論文を中心に－”をテーマとして、11月30日教育人間科学部教員向け、12月7日学生向けに利用者講習会を実施しました。

前者は、今年度、国立情報学研究所提供のデータベースであるGeNiiの正式サービスを受け、主にGeNiiの説明を教授会終了後実施し、46名が出席しました。

後者は、GeNiiだけでなく本学で利用できるデータベースの紹介、概要説明、検索方法、論文の入手方法等、論文入手のための一連の流れを説明しました。会場には、大学院生、及び次年度卒論を控

えた3年生を中心に予想を超える102名が参加し、会場は熱気にあふれ、会場に入りきれなかった方からは資料の希望も図書館に寄せられるなど、学生の関心の高さが伺われました。

今後は、会場の広さ、実施の頻度・時期、説明形式だけでなく演習形式の講習会の実施等を検討し、学習・研究支援をより一層進めていきます。なお、ゼミ単位の出張講習会も受け付けています。本館：情報サービスグループ、医学分館：医学情報グループにご相談ください。



山梨大学近代文学文庫常設展を開設

『明星』とそこに集った詩人たち

附属図書館では、本館2階に常設展示室を新設し、山梨大学近代文学文庫常設展『「明星」とそこに集った詩人たち』を開設しました。山梨大学教育人間科学部国語教育講座で蒐集している「近代文学文庫」の中から、第一次、第二次明星、またそれに関わった詩人の著作などを展示しています。



正式オープンに伴い、11月30日にオープニングセレモニーを行いました。学長、附属図書館長の挨拶に続いてテープカットが行われ、その後、参列者の方々は、教育人間科学部国語教育講座の中丸



先生から説明を受けながら、熱心に展示物に見入っていました。

*常設展は、開館時間中、どなたでもご自由にご覧いただけますので、お越しく
ださい。(学外の方は入館の際に入館票
の記入をお願いします。)



近代文学文庫と常設展について

昭和二十五年度以来蒐集を続けてきた山梨大学近代文学文庫には、明治・大正・昭和期の日本文学を彩る様々な作家の初版本や文芸雑誌が多く収蔵されています。

その中でも雑誌「明星」とそこに集った若い詩人たちの著作は、貴重なものと言えましょう。今回の展



示では、「明星」の原本をはじめとして、その主宰者である与謝野晶子、与謝野鉄幹らの著作、また島崎藤村・上田敏・石川啄木といった「明星」に縁ある作家たちの著作を展示しています。

それらの本は、現在のともすれば画一的な造本やデザインから一線を画した、斬新で個性的なものとなっています。それらは、文学的な興味に止まらず、美術史的な興味をも十分に喚起してくれるものと思われま

主な展示物

- 「明星」：第一次 新聞版，第一次，第二次
- 与謝野晶子
みだれ髪 (1901(明34)年)
小扇 (1904(明37)年) など
- 与謝野鉄幹
東西南北 (1895(明28)年)
天地玄黄 (1897(明30)年) など
- 吉井勇 北原白秋 上田敏
島崎藤村 石川啄木 ほか

「神沢利子講演会」開催

附属図書館子ども図書室では、2006年1月18日に「書くことと、生きることー幼年文学を中心にー」と題して、童話作家の神沢利子さんによる講演会を開催しました。



制作活動に大きな影響を与えた樺太での幼少時代から幼年文学を執筆するに至った経緯、作品の制作方法など自身の人生と幼年文学との関わりを中心に約一時間半に渡り講演が行われました。また、初の長編となった「ちびっこカムのぼうけん」や代表作の一つである「くまの子ウーフ」など個々の作品に関するエピソードも語られました。

ユーモアを交えつつも、作品やこれからの子どもたちに対する想いに溢れた講演に、講演会は終始和やかな雰囲気が進み、地域や学内から訪れた約120人の聴衆が聴き入っていました。



お知らせ

■ 学外の方への利用案内

本館及び医学分館は、山梨大学以外の大学生をはじめ一般社会人の方々も利用できます。詳細については、<http://www.lib.yamanashi.ac.jp> をご覧いただくか、本館 Tel 055-220-8066 (情報サービスグループ)、医学分館 Tel 055-273-9357(医学情報グループ)にお問い合わせください。

「恐竜の切手・絵本展」開催

附属図書館子ども図書室では、2005年10月24日から11月12日の子ども図書室開室時間に「恐竜の切手・絵本展」を開催しました。会場には恐竜がデザインされた世界各国の切手数百点や恐竜に関する絵本、スタッフにより作成された恐竜のクラフトなどが展示されました。期間中は地域の親子連れを中心に約450人が来場し、色鮮やかな切手や絵本に見入っていました。



期間中に開催された梨甲祭でも関連するイベントを行い、学生スタッフが読み聞かせやゲーム、工作などで子どもたちを楽しませました。



最終日に行われた、山梨県立科学館の跡部浩一氏を講師として迎えての「ワークショップ 恐竜の世界へようこそ」では、恐竜や化石の時代についての講演や、アンモナイトの工作などを行いました。また実際に石を割って本物の化石を探す時間もあり、化石を発見した子どもたちは普段できない経験に目を輝かせていました。



山梨大学附属図書館報 「やまなし」 第3巻第2号

2006年3月1日 発行
編集：館報編集委員会
発行：山梨大学附属図書館
〒400-8510
甲府市武田四丁目4-37
TEL 055-220-8063